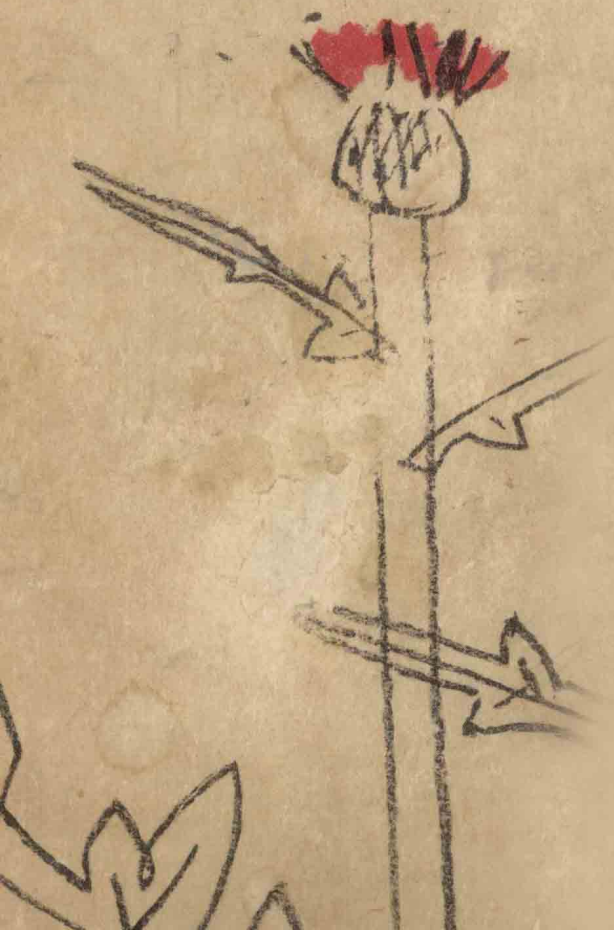


ばい

ん

し

(上)

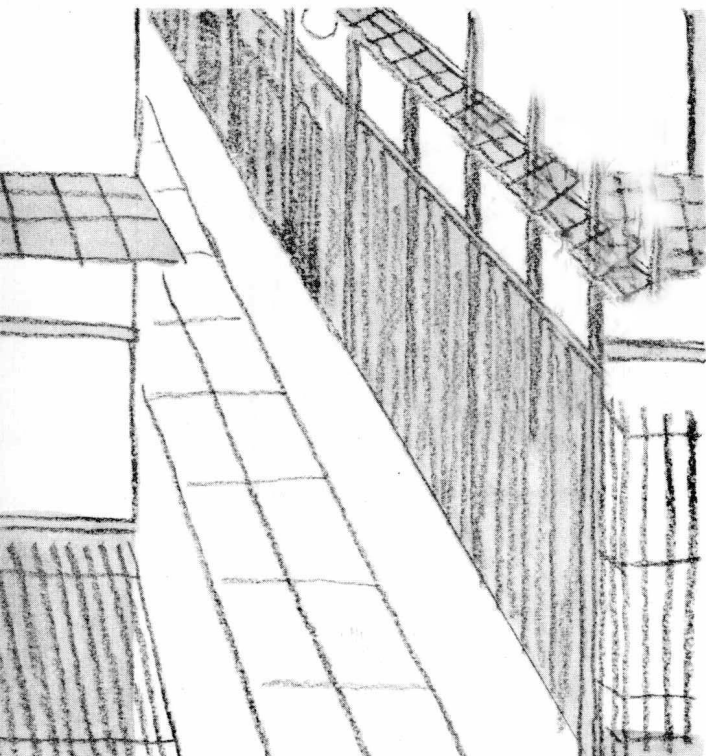


ばんち

上巻

山崎 豊子

新潮社



ほんち 上巻

昭和三十四年十一月十一日印刷
昭和三十四年十一月十五日発行

定価 二百五十円

著者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本所

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京代表(34)七一一一
振替 東京 八〇八

〈検印廃止〉

乱丁・落丁のものはお取替えいたします。

© by T. Yamazaki

ぼ

ん

ち

上

巻

題 裝
字 幀

字 中
野 村
雪 貞
村 以

第一章

月の朔日、十五日になると、きまつて、着物の上から下まで、すつぽり新に着替える。大島紬に羽二重の長襦袢はむろんのこと、肌襦袢、下履きまでである。このために、三人の針女が、小暗い六畳の縫物部屋で一日中、針を運んでいる。

喜久治は、眼の前の乱れ籠に重ねられた仕立おろしの大島紬を見ながら、生ぬくい欠伸をした。宿酔のせいである。五尺六寸の大柄な体を、怠そうにだらりと支え、上女中のするままに任せている。上女中のお時は、出戻りの年嵩女中だけあって、喜久治が風呂上がりの素っ裸のままでも、瞬き一つしない。手馴れた具合に前へ廻って、一番下のものを履かせ、次に晒の肌襦袢を着せ、蟬羽のように軽い絹の長襦袢を、ふわっと肩にかけると、ここで一服、煙草を差し出す。喜久治は、唇の端へ煙草をくわえ、

「どうやねん、店の方は」

「へえ、相変らずの繁昌でござりまっけど——」

どうせ本気で聞いていることを知って、お時もいい加減に調子を合せた返事をしておく。喜久治はそれ以上、聞きもせず、硝子障子越しに薄い春陽の射している奥前栽を見た。上半分を障子紙、下

半分を硝子で仕切った硝子障子の向うに、陰気な前裁が広がっている。庭木は、槇、檜、松など常磐木に限られ、色花は下品なものとされているから、庭全体が黒ずんだ緑一色になっている。僅かに御影石の燈籠と緋鯉を放った池が、目がわりな彩りになる。

広縁づたいに、白い絹足袋が四つ、もつれ合いながら、音もたてずに歩いて来る。どちらも九文足らずの、小さい華奢な足もとである。祖母のきのと、母の勢以であった。離れの隠居部屋から、喜久治の部屋へ連れそって来るのであることは、その足もとからして、一目で解った。

お時が、うしろにまわつて大島紬の着物を着せかけ、腰骨の上のあたりでしゅっと、しごくように細帯を締め、手早く博多独鈷の角帯を結びにかかった。その手早さで、お時も、きのと勢以の気配を見て取っているらしい。ちょうど角帯を貝口に、びしっと結び終えた時、喜久治の背後で、硝子障子が開いた。

「あ、お家はん、御寮人はんもお揃いで——」

と云い、お時は、座敷の隅に重ねた八端織の座布団を三枚並べて、敷居際へ退き下がった。座布団の敷き方は間違ひなく、二枚は、上手に、一枚は下手に並べて敷いたが、上手の右側の方を一寸下げた。喜久治は黙って、下手の一枚に坐り、お家はん（女隠居）の祖母は、上手の左側、御寮人はん（奥さん）の母は、右側の一寸下がった座布団へ坐った。祖母のきのは、敷居際のお時に、お退りいと云い、お時は、障子を閉めて退つてしまうと、

「喜久ぼん、あんた、この頃、ちょっと遊びが過ぎるのやおまへんか」

六十近くになつても、家風呂で毎朝、赤い糠袋を使う祖母は、艶を失わない額の下から、探るような眼つきで云った。母の勢以も、その言葉尻をつないで、

「そら、あんたも、もう一人前の大人やけど、世間体には、まだぼんぼんの部屋住みの身分でつせえ」

喜久治は、返事をせず、素知らぬ体で着物の衿の重ね具合を直した。衿もとから背筋へかけての線が、女のように色白で豊かな肉付きであつた。面長な顔の中で、濃い眉と切れ長の眼がきつい感じてあつたが、やや受け口の唇は、男にしては紅味がちすぎていた。

「内々でならともかく、こない店の者の耳にも入るようには、おおつぴらになつたら、いきまへん」
勢以が重ねて云つたが、喜久治は、ちよつと口もとを動かしかけただけで、やはり答へなかつた。

「それも、料理屋やお茶屋の金使いが手荒い云うのならともかく、体裁の悪い女遊びやいうことやおまへんか。うちの店の信用にもかかわるさかい、恰好の悪い女遊びをぶつとり止めるか、嫁はん貰うか、どつちかに決めなはれ、もう、これ以上は、堪忍なりまへん」

止めを刺すように、祖母はぬきさしならぬ理由をあげた。それでも、喜久治は、押し黙つていた。祖母と母の顔を見詰めるでもなく、かといつてよそ見をするでもなく、くわえ煙草で、のほほんと坐つていた。

「喜久はん、わてらの云うてること、まともに聞いてなはんのか」

母が苛だたいしい声を出した。喜久治は軽く頷いた。

「ほんなら、なんかあんたの意見も云いはつたら、どうだす」

「わいの意見でつか」

喜久治は、はじめて、ほそりと口を開いた。

「云うたかて、云わんかて、一緒でつしやる」

と云い、二十二歳にしては、やや肉の乗り過ぎた大柄な体を、ものぐさげに、ゆっくり動かした。

「それ、不服で云うてはりまんのでつか」

祖母のきのが、袖口から、細身の煙管を取り出しながら、気色ばむと、母の勢以が、

「お母はん、そない氣短かに云いはらんかて、喜久ぼんは、あんじよう云うたら、納得してくれはりますわ」

「そうやろ、あんじよう云うたらな、あんたらが、聞怠^{まだる}うに育てるよつて、おとなしいのやら、ふてぶてしいのやら解らん人間になつたんだす。わてはあんたを、こんな具合には躰^{たて}けへんかつたわ、な」

祖母の掌の中で、金細工の煙管がきらりと光つた。

「すんまへん、お母はん、さあ、喜久ぼん、お祖母ちゃんに堪忍しておもらいやす——」

母の勢いが肩を揉むようにして、とりなしたが、それが芝居であることは喜久治に、ちゃんと読み取れた。

腹の中で、喜久治はフンとせせら笑つた。世間の嫁姑じやあるまいし、血の繋がつた親子同士で、芝居がかつた氣兼ねをしているのが見えすいている。しかし、こんなことは今日に限つたことではなかつた。河内屋の家内^{いんうち}では、始終、繰り返されていることだつた。

河内屋は、四代を経^{あつ}ていたが、初代からあと三代はずつと跡継ぎ娘に養子婿を取る母系家族であつた。初代の河内屋喜兵衛は明和年間に河内長野から行商しながら大阪へ出て来、本町の足袋問屋へ奉公し、暖簾^{のれん}分けをしてもらつて、西横堀に一軒の店を構えたのであつた。それから三代続いて、一人娘ばかりであつた。老舗のしきたり通り、番頭の中から婿を選んで暖簾を継いで来た。祖母のきのも、母の勢いも、そうであつた。喜久治の父である四代目、河内屋喜兵衛は、四十八歳の今になつても、母にはもちろん、祖母にも頭が上がらなかつた。

祖父の三代目、河内屋喜兵衛が生きている時は、喜久治の父は、自分の本名である伊助と呼ばれていた。祖父自身も番頭上がりの養子旦那であつたが、自分と同じ経歴である伊助に同情がなかつた。

考えようによつては、伊助を見る度に、思い出したくない丁稚や手代時代の自分の姿に出くわすからかも知れなかった。

喜久治は、五つ、六つのものごとく頃から、祖父が、自分を『喜久ぼん』と呼ぶくせに、父に向つては『伊助』と呼び捨てにするのを知つていた。小学校へ入つて、友達の家へ遊びに行くようになったから、俄かに自分の家の異常さが氣になった。母の勢以に、聞くと、

「そら、私家は、他家さんと違いますねん。わても、お祖母ちゃんも、御先祖はんのほんまの血筋やけど、お父はんは、他家からうちのお店へ働きに来はつて、それから私家のお婿はんになりはつたからだす。そやから、お祖父ちゃんは、あんたに喜久ぼん云いはるけど、お父はんには、昔、番頭はんやつた時と同じように伊助云いはりまっしゃろ」

と説明した。この意味が長い間、喜久治の頭へ呑み込めなかつたが、ともかく、父より自分の方を、祖父、祖母、母をはじめ、奉公人たちも喜久ぼん、喜久ぼんとたてているようだった。

商業学校へ入つた頃からは、父を伊助と呼び捨てる祖父がまた、祖母はもちろん、自分の娘である母にまで、遠慮がちであるのに氣付いた。

ちようど喜久治が商業学校の三年生になつた年の暮れ、祖父の兄になる大伯父が、お正月の鏡餅を持って大阪へ訪ねて来た。以前に小学生の頃一度、訪ねて来たきりであつたが、喜久治は骨太で茶褐色の皮膚をもつた大伯父が、前から強い頼もしい人のように思つていた。七十近くになつてゐる筈であつたが、祖父より若く達者に見えた。祖父はどうしたことか、せつかく和歌山から訪ねて来た大伯父をあまり大事にもてなさなかつた。祖母も母も、最初の挨拶に出たきりで、あとは食事から寝具の用意に至るまで、みな上女中がまかなつた。道頓堀の芝居見物も、女中だけがお伴であつた。

大伯父の大きな懷から磯の香が、ぶーんと匂つた。祖母と母、それに女中たちに取り囲まれ、まだ

店へ出ることを許されない喜久治にとって、それが云いようなない魅力であつた。息詰まるような漁場の網打ちの話を聞き、何時の間に、大伯父の分厚い膝のそばへ寝転んでいた。

突然、がらりと客間の襖が開いた。母の勢以であつた。

「まあ、伯父さん、何もお構いせずにご無礼さんだす、いろいろと家内が忙しゅうおまして――、なんぞご用がございましたら女中に申しつけておくれやす。さあ、喜久ぼん、こつちに用がおます」
丁寧ではあつたが、白々しい他人行儀な挨拶をして、喜久治を連れ出そうとした。大伯父は、少しもこだわらず、茶褐色の皮膚を柔らげ、

「いや、お世話になります、わしも、もう、今度、こうしてお伺いできるのが最後じゃと思つとります。喜久治さん、大きゅうなりやあしたな」

喜久治さんと云われたのが、氣に障つたらしく、勢以は、

「へえ、おおきに、おかげで喜久ぼんも」

とわざと、ぼんのところに力を入れた。喜久治は、その母の横柄さが、十五歳の心に無性に腹だたしかつた。

「いやや、わいは大伯父さんとの網打ちの話が面白いのや」

こう突つぱねると、母の勢以は、肌目の細かな白い顔を、ぱつと朱走らせ、手荒に襖を閉めた。

その夕方、喜久治は、祖父母と両親の間にはさまつて、氣詰まりな食事をしていた。大伯父は、同郷の大阪の知り合いのところへ招かれて、家にはいなかった。十畳ほどの台所の板の間には、箱膳が、大番頭から手代、丁稚の順に並べられ、大番頭から順に入つて来て、板の間の次に一段高い畳敷きになつた茶の間の方へ手をつき、

「ごはん戴かせてもらいます」

とお上たち（主人一家）に挨拶して食事にかかる。番頭が済むと手代、手代の次に丁稚という順繰りに、食事をすますと一人、一人が自分の箱膳を水屋に納めて退つて行く。

茶の間の方では、奉公人たちのおばんさい（惣菜）と異り、五品揃いの贅沢な配膳になっている。喜久治は四日つづきの刺身に口の中が生ぐさくなるような思いで箸を動かしていた。時々、ちらっと祖母のきの方を見た。祖母は何時もより高い音をたてて入れ歯を、最後のお茶ですすぎながら、時々、小意地の悪い目を祖父に向けた。祖父がわざと素知らぬ振をしたのが、祖母の癪に障ったらしい。

「あんさん、今日もまた兄さんが、喜久ぼんを膝もとへおいて、漁師の話を得々と、しはつたらしいでっせえ」

「ううん」

祖父は、曖昧に頷いた。

「ううんやおまへん、勢以が、呼びたてに行つても、放しはれんかったそうだし、喜久ぼんは商人になるのでっさかい、鰯や蛸の話は要りまへん」

祖父は当惑しきつていた。祖父の横に坐っている父は、それ以上低くできないほど頭を俯けて、祖父から視線をそらしていた。

「わては、あんさんが、うちの番頭はんから旦那はんになおりはる時に、ちゃんとお願ひしておきましたやろ。あんさんのお実家とは、できるだけつき合わんといっておくれやすと——、まあ、あんさんが一年に一回、お墓参りに歸りはる程度にしてほしい申しましたやろ」

ぐいと相手の胸を小突くような祖母の語調であつたが、祖父は氣弱に眼を瞬かせた。

「お祖母ちゃんの阿呆たれ！」

喜久治は、いきなり箸をお膳の上へ投げ出した。祖父は体を前屈みにしたかと思うと、

「それ悪かったな、和歌山の兄さんも悪気やないけど、ついあの、人の善さで漁師は浜のことしか知らんさかい、そればかり話し込んでしもうたんや。まあ、そない本気で怒らんといてやってほしいな、勢以、あんたもな——」

祖父は、自分の娘の勢以を、『あんた』と呼び、弁解がましい云い方をした。父と娘というよりは、番頭と主家の娘に近い妙に遠慮したものの云い方であつた。

「お父はんが、そない云うてくれはるのやつたら、わてもお母はんも、これ以上何も云うことおまへんわ」

母の勢以は、半ば甘えるように祖母の方へ首をかしげたかと思うと、急に夫の方へ向き直り、「あんさんも、よう聞いといておくれやす。あんさんとこのお実家きととも同じことだすさかい——」と云つた。父は、祖父以上に狼狽した表情で、頷いた。

これが喜久治の少年期の記憶にある河内屋の家族関係であつた。家付き娘の祖母、そして、母も同じ養子取りの娘、このような母系家族が、曾祖母から三代も重ねられていた。三代の間に何時の間にか、河内屋の跡継ぎ娘たちは、夫を種馬同様の扱いにすることを、不思議に思わなくなつていた。

喜久治が商業学校を卒業する年に、祖父が卒中で倒れ、父が四十三歳で四代目、河内喜兵衛を継いだが、やはりこの家族関係は変らなかつた。かえつて、家付き女二人と、番頭上がりの養子旦那一人という、人数の上からも、さらに女性支配の奇妙な家族が出来上がってしまった。

父の喜兵衛は、店の間に坐つて商いする時だけが旦那はんで、一步、くぐり暖簾あぐらをくぐつて奥内に入つて来ると、番頭上がりの節度をわきまえて、旦那はんの座についていた。

祖父が亡くなると、急に祖母と母が派手になった。祖母は五十三歳であつたが、鼻筋がつんと通り、切れ長な眼がよく光り、権高けんたかであつたが、隠居風に髪かみをつめた顔は、藤とうたけていた。母の勢以も、祖母

に似た器量よしであつたが、祖母より丸顔で、受け口の口もとが甘かつた。三十五歳になつても、気性者の実母の袖のかげから、したいこと、云いたいこと三昧にして来た人間の甘さが、顔にも出てゐるようだった。

この頃、欧州大戦が始まり好景気のきなかであつたが、呉服屋の出入りが激しくなると、さすがに父の喜兵衛も、その支払いが苦勞になつてきたらしい。節季せつき（月末の支払い、集金日）になるときまつて、祖母のきのが、何時にない遠慮がちな声で、

「あんさん、小大丸こだまるはんのお払い頼んまつせえ」

と云うと、結界けっかい（帳場格子）の中の父の喜兵衛は、

「へい」

と答え、云われた額だけ支払つた。

「あんさん、ちよつと——」

今度は、母の勢以が愛想笑いを泛はなべながら、

「奥内料おくうちりょう（うちの賄い料）、ちよつと足りまへんねん」

「へい」

また喜兵衛は、不足分だけ黙つて手渡す。その間、女二人は、ちよつと取つてつけたような間の悪い笑い方をするが、喜兵衛はへいと答えるだけで、鉛で塗り固めたような無表情な顔をしていた。

これが、二十二歳になるまで喜久治が見て来た父の姿であつた。暖簾のれんと財力が、一切を支配する船場せんばのことであるから、家付き娘の権力が、養子旦那を凌ぐ場合は他家にもある。しかし、三代も母系を重ねた河内屋の場合は、何か異様な氣配に包まれているようだった。喜久治は、父の喜兵衛を不甲

妻なく思うとともに、この船場の母系家族を代表するような二人の女に、燃え殻のような煙臭い反感と警戒心を持った。

陽が翳り、急に座敷の中が陰気な暗さに包まれた。きのと勢以は、小意地の悪い根気の良さで、先程から喜久治の返事を待っている。

「ところで、要はどないせえと云いはりますねん」

痺を切らして、今度は喜久治の方から、口を切った。

「おとなしに嫁はんをおもらいやす」

勢以が、急に優しい語調で云った。

「嫁はん？ 早すぎますがな、これ以上——」

と云いかけ、喜久治は口ごもった。これ以上、一家に女三人はご免やと、云いたいところであった。祖母のきのが、眼尻にわざとらしい笑い皺をみせ、

「そない云わんと、あんたは大事なほんほんやさかい、妙な傷もんにならんうちに、ええ女雛はん探したげまっさ、ほんなら、みつともない女遊びせんとすむよってな」

と云い、眼がキラリと光った。お家はんの光り眼と、女中や、丁稚の間で怖れられている気強い眼であった。喜久治も、ふと気圧されがちになり、一体、誰が、わいの女遊びを告げ口したのやろと、腹の中で舌打ちした。

喜久治が遊び始めたのは、二年前の高商を卒業する頃であった。学校を出ても、河内屋足袋問屋の五代目になることに定まっているから、別に改まって勉強する必要もなかった。最終序列から十四、五番内の辺りをうろうろし、わいがええ成績を取れへんのは、就職せんならん奴のための犠牲打やなど、勝手な理屈をこじつけて遊んでいた。

遊び仲間は、自然と老舗のほんほんばかりが寄り集まり、はじめのうちは千日前や道頓堀の活動や喫茶店を遊び廻っていたが、何時の間にか、飛田へ出入りし、卒業する頃には、女をちゃんと知っていた。材木屋の笹川繁三に連れられて、始めて、飛田へ上がった時、喜久治はそのことより、女が下婢のような仕え方をするのに驚いた。定まった金額の倍を支払った。女は、泣くようにして喜び、喜久治に体ごとを尽した。

これは喜久治の思いがけない発見であった。家の中で、お家はんと奉られる祖母と、御寮人ごりやうはんと氣を使われ、奉公人はもちろん、自分の夫や父までも下目しために見て過している女の間に育てられた喜久治は、はじめて異なった仕種しぐさをもった女に出会った。しかも、金さえ与えれば、下婢のように尽す――。

喜久治は、快い解放感を味わった。

家で、祖母と母が、何かのことで、我意を通すことがあると、その日は必ず、喜久治は女のところへ遊びに行った。そして、さんさん女に仕えさせて、気分なおしが出来てから、素知らぬ顔をして家へ帰った。

この喜久治の娛しみは、その後もずっと、きのにも、勢以の耳にも入らなかったのに、今時になって、なぜ氣付かれたのか解らなかつた。喜久治は、ふと、笹川繁三の背の低い肥った体を思い出した。近頃、馴染みの女が出来てから、急に膨れるように肥り出し、だれ彼れなしに、女のことを吹聴して廻っていることに思い当った。

「なんでも、わいのこと承知の上で云うてはりまんのやろ」

喜久治は、先手を打つように云った。

「そうだす、そやさかい、まあ、わてらに任しはることや」

すかさず、こう引き取って、祖母のきのは、もう一度、例のよく光る眼を、喜久治の顔に当てた。

その翌日から、きのと勢以が氣忙しげに外へ出かけたり、客間で來客と話し込むことが多くなり、人の出入りが激しくなった。その中で、一見して、世話好きに見える五十そこそこの色の黒い女の入りが目だって激しかった。それが、仲人の内田まさで、高麗橋に砂糖間屋を構えている高野市藏の長女を縁談に持ち込んで來ていた。

高野市藏は丁稚から砂糖株でのしあげた成上がりせんばの船場商人で、三年前の大正五年から、大阪の長者番付の中へ入っていた。財力は持つてゐるが暖簾のれんがなかったから、五人兄妹の二人の娘は、内輪の苦しいへたり暖簾でもいいから暖簾のある老舗をと、望んでいた。

高野市藏から、どれほど仲人料が払われる約束になつてゐるのかと疑うほど、内田まさは根こんを詰めて河内屋へ足を運んだ。堀江の小さな小間物問屋の隠居である内田まさは、二言目にお家は、御寮人はんと、まるで一段上うわめ目な人を扱うように奉つたから、きのも勢以も調子付いてしまった。

内田まさから見れば、きのと勢以は、船場の老舗に生まれ、恒産があり、そのうえ家付き娘で、器量よしと來てゐる。しかも三代も重ねた母系家族で氣随氣儘に増長してゐる女であることは、百も承知であつた。縁談の最中でも、きのと勢以は、二言目に、船場のしきたりは、船場の奥内おくうちはと、氣分が悪くなるような高飛車であつたが、内田まさは、相手がつけ上がるほど、へり下り、つけ上がり尽した頃を見計らつて、

「何なりと、こちらさんのおっしゃる通り、高野さんではさして戴きたい云うてはります、なんし、錢金にかえられん暖簾内うちへ入れて戴きますねんよつて」

と揉み手で機嫌を伺うと、きのも勢以も、もう云うこともなく、